

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：32644
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2019～2021
課題番号：19K00277
研究課題名(和文) 進化心理学の起源と適応主義 他にありうべき道筋 の構想

研究課題名(英文) the origin of evolutionary psychology and adaptationism

研究代表者
松本 俊吉 (Matsumoto, Shunkichi)

東海大学・スチューデントアチーブメントセンター・教授

研究者番号：00276784
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：「本研究は、進化心理学の方法論を歴史的・批判的に検証し、現行の進化心理学における正当化可能な前提と、歴史的・付随的要因によって採用された正当化され得ない前提を腑分けすることにより、現在においてもいぜん影響力あるパイオニアたちの発想から自由な、より可塑的な人間心理の進化的研究の方向性を提言する」という当初掲げた研究目的のうち、「～ことにより」までの前段は当初の目標をほぼ達成し、その成果を国際誌に発表した。ただし、「現在においても～」以降の後段に関しては現在も研究を継続中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
進化心理学が採用する人間本性の生得論(例えば「モジュール集合体仮説：MMH」)は、社会的な制度改革や懲罰的な抑止策によって人間の非倫理的・反社会的な行動をどこまで後天的に(環境によって)矯正しうるかという問題、さらには犯罪行為の帰責問題などとも関係してくる、極めて大きな社会的含意をともなう立場である。1990年代以降現代にいたるまで彼らがほぼ無修正に採用しているこうした立場が、21世紀のあらたな生命科学や脳神経科学の展開の中でどこまで維持されうるものであるのかを実証的に検討するというのが、この研究の背景にある一つの社会的動機であった。

研究成果の概要(英文)：I initially set up the goals of this research to be that "this research will examine the methodology of evolutionary psychology from a historical as well as critical point of view, discern their justifiable assumptions from those unjustifiable ones that happened to be adopted under historically contingent conditions, thus eventually aims to propose new directions for the evolutionary studies of the more plastic human mind that are free of assumptions of the pioneers of this discipline still influential today." Among these goals, I was able to attain the first two (until the part "contingent conditions") and publish the accomplishments as a paper run on an international journal. But as for the final one (from the part "thus eventually"), I am still working on it.

研究分野：生物学の哲学

キーワード：進化心理学 適応主義 適応思考 発見法 進化生物学 生物学の哲学 還元主義バイアス ブートストラップ戦略

1. 研究開始当初の背景

進化心理学は、そのマニフェストとも言うべき Barkov, Cosmides, and Tooby (1992) Adapted Mind の出版以来、われわれの心の起源を解明する実証的な研究プログラムとして、アカデミズム内外の大きな関心を集めてきた。しかし、一部の筋でメディア受けする「ポップな」仮説が量産され、厳密な科学的検証を経ることなしに流通しているというのも事実である。では、それは単に方法的自覚を欠いた一部の研究者の「モラル」の問題に還元されるのかということ、必ずしもそうではなく、むしろ進化心理学の方法的基礎自体にそうした現象を誘発させがちな脆弱性・不確実性が内在しているのではないかというのが申請者の見立てである。すなわち、現在の進化心理学は、初期のパイオニアたちが、自ら打ち出した研究プログラムを、その当時のライバルであった伝統的な非進化的・認知主義的な心理学に対抗して正当化する必要上、かなり性急かつ強引に構築した理論的前提に依然として拘束されているところがあるのではないだろうか。

本研究では、科学哲学的な観点から現行の進化心理学の方法的基礎の脆弱性を検証し、それがより健全な研究プログラムへと脱皮するためには何が必要であるのかを提言する。

2. 研究の目的

本研究は、進化心理学の的方法論を歴史的・批判的に検証し、現行の進化心理学における正当化可能な前提と、歴史的・付帯的要因によって採用された正当化され得ない前提を腑分けすることにより、現在においてもいぜん影響力あるパイオニアたちの発想から自由な、より可塑的な人間心理の進化的研究の方向性を提言する。そのために、パイオニアたちが自らの研究プログラムの科学的正統性(仮説のテスト可能性)の論拠として挙げた「進化的機能分析」なる推論法に着目し、それが彼らの意図した機能をどこまで果たしているかを様々な角度から検証する。さらに、進化心理学者がその理論的権威として依拠する進化生物学において、前世紀末より議論されてきた「適応主義」をめぐる論争の文脈の中に、進化心理学の立ち位置を位置づけることによって、ダーウィニズム全般の中での進化心理学の特異性を浮かび上がらせる。

3. 研究の方法

(1) 2019年度「進化心理学の擁護派と批判派の議論の洗い直し」: 本研究に本格的に着手するに先立って、欧米の心理学者・生物学者・哲学者の間でこれまで活発になされてきた進化心理学をめぐる論争をいま一度総括する。

(2) 2020年度「『進化的機能分析』における適応主義的前提の検証」: 進化心理学の的方法論の根幹ともいえる「進化的機能分析」によって、どこまで進化心理学の「科学性」が担保されるかという問題に、適応主義的推論の妥当性という観点からアプローチする。

(3) 2021年度「他でもありえたような道筋を描き直す」: 前々年度と前年度の研究成果を踏まえ、進化心理学者が自らの理論的権威として依拠する進化生物学の文脈における、「適応主義」をめぐる論争史のなかに進化心理学の立ち位置を位置づけることによって、ダーウィニズム全般の中での進化心理学の的方法論の特異性を浮かび上がらせるとともに、中立進化説、進化発生生物学、エピジェネティクスといった近年の新たな(進化)生物学の理論的展開をも参照しつつ、より柔軟で可塑的な人間心理の進化的研究の方向性を提言する。

4. 研究成果

(1) 2019年度

本研究の申請時の調書の研究計画には、2019年度の研究計画として「進化心理学の擁護派と批判派の議論の洗い直し」と記したが、諸般の事情により今年度は、2020年度の研究課題として挙げた「『進化的機能分析』における適応主義的前提の検証」を前倒しして実行に移し、学会発表2件、海外学術誌への投稿(審査待ち)一件という成果を得た。

2019年8月上旬にプラハで開催された CLMPST 2019: 16th International Congress of Logic, Methodology and Philosophy of Science and Technology の大会にて、“How Can We Make Sense of the Relationship between Adaptive Thinking and Heuristic in Evolutionary Psychology?” という演題の一般報告を行い、進化心理学の中心的な推論法である適応思考(=進化的機能分析)を単なる発見法(heuristics)と解釈することによって、これまで批判者からなされてきた方法的な観点からの批判を回避しようとする近年の進化心理学者の試みは、人間の心的構造の進化的起源を説明するという進化心理学本来の「レゾ

ンデートル」を放棄し、その学問的統一性を危機に晒しかねない、と論じた。

8月下旬に自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンターで開催された第13回生物学基礎論研究会では、上記の CLMPST での報告を日本語版として作り替えたものを報告した。

その後、上記二つの口頭発表の内容をさらに深化させたものを英文原稿“Making sense of the relationship between adaptive thinking and heuristics in evolutionary psychology”としてまとめ、11月に *Biology & Philosophy* 誌に投稿したが、残念ながら翌年2月にリジェクトの通知が来た。そこで同月に改定原稿を今度は *Biological Theory* 誌に投稿し、現在結果待ちの状態である。

(2) 2020 年度

昨年度の本報告書の「今後の研究の推進方策」の欄で、「2020年度は、現在 *Biological Theory* 誌に投稿・審査中の論文を、(すんなり一度で受理されるのは難しいと思うので)とにかく根気強く掲載にまで漕ぎ着けることが、ひとまず最優先課題となる」と書いたとおり、今年度は上記国際誌に研究論文“Making sense of the relationship between adaptive thinking and heuristics in evolutionary psychology”を最終的に掲載することができた(ただし、案の定すんなり一度で受理されるわけにはいかず、ほぼリジェクトに近い段階から何度も査読者の要求に応じて原稿を修正し、ようやく2021年2月27日に掲載に至った)。これは、進化心理学を一種の発見法的プログラムとして解釈することによって、提起された仮説を進化心理学者自ら厳密に検証するという責任を回避する - - あるいは周辺関連分野の研究者に委ねる - - という近年多くの進化心理学者が採用し始めている方法論的立場を批判的に検討したものである。私の主張は、「発見法」には Wimsatt (2007) が指摘するような「還元主義のバイアス」に陥るリスクが常にともない、しかも信頼性に欠ける - - 特に人類進化史上の証拠による裏付けの乏しい - - 適応思考(という発見法)によって発案された仮説は、探査されるべき「仮説空間」を縮減し有望な仮説を絞り込むことによって最終的な検証の労を軽減するどころか、逆に進化心理学者自身が自覚していないバイアスの導入によって仮説の最終的な検証に求められる厳密性の水準を高めることになりがちである、というものである。

これは2020年度の研究テーマとして調書に挙げた『『進化的機能分析』における適応主義的前提の検証』を実施した成果となる。

(3) 2021 年度

2021年度は、2月に *Biological Theory* (BTHE) 誌に掲載された拙稿“Making sense of the relationship between adaptive thinking and heuristics in evolutionary psychology”の内容を、国内外の様々な学会や研究会で報告し、その成果を問う一年となった。

まず7月に Asia Pacific Philosophy of Science Association と International Society for the History, Philosophy and Social Studies of Biology という二つのオンライン国際会議で、BTHE 掲載論文のエッセンスを抜き出した同一タイトルの報告を行った。

さらに、BTHE 誌の掲載論文に目を留めた英国の Research Outreach 社という学術研究広報活動を行っている出版社から私の研究内容を紹介したいという申し出を受け、9月に同名のジャーナルに、“Adaptive thinking as a heuristic in evolutionary psychology” というタイトルの特集記事が掲載された。

また12月には、私の APPSA での発表に目を留めた東京大学駒場キャンパスの外国人スタッフが運営している Tokyo Forum for Analytic Philosophy というオンライン講演会に招待され、“On the Heuristic Interpretation of Evolutionary Psychology and the Role Adaptive Thinking Plays as Its Primary Heuristic” というタイトルの講演を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Shunkichi Matsumoto	4. 巻 16
2. 論文標題 Making Sense of the Relationship Between Adaptive Thinking and Heuristics in Evolutionary Psychology	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Biological Theory	6. 最初と最後の頁 16-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s13752-020-00369-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松本俊吉	4. 巻 67(5)
2. 論文標題 地盤工学に関する科学哲学と技術者倫理 3. 進化的に説明するとはどういうことか 歴史科学としての進化生物学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地盤工学会誌	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shunkichi Matsumoto	4. 巻 125
2. 論文標題 Adaptive thinking as a heuristic in evolutionary psychology	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Research Outreach	6. 最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32907/R0-125-1657568623	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Shunkichi Matsumoto
2. 発表標題 How Can We Make Sense of the Relationship between Adaptive Thinking and Heuristic in Evolutionary Psychology?
3. 学会等名 16th International Congress of Logic, Methodology and Philosophy of Science and Technology（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本俊吉
2. 発表標題 進化心理学における適応思考と発見法との関係はどう考えるか
3. 学会等名 第13回生物学基礎論研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shunkichi Matsumoto
2. 発表標題 Making Sense of the Relationship between Adaptive Thinking and Heuristics in Evolutionary Psychology
3. 学会等名 The 9th Asia-Paciic Conference on Philosophy of Science (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shunkichi Matsumoto
2. 発表標題 Making Sense of the Relationship between Adaptive Thinking and Heuristics in Evolutionary Psychology
3. 学会等名 The International Society for the History, Philosophy, and Social Studies of Biology (ISHPSSB) Biennial Meeting 2021 (Virtual) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本俊吉
2. 発表標題 「嚢胞性線維症の遺伝子」同定をめぐる哲学的問題
3. 学会等名 第14回生物学基礎論研究会 (オンライン大会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shunkichi Matsumoto
2. 発表標題 On the Heuristic Interpretation of Evolutionary Psychology and the Role Adaptive Thinking Plays as Its Primary Heuristic
3. 学会等名 Tokyo Forum for Analytic Philosophy (TFAP) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本俊吉
2. 発表標題 生命科学の哲学入門 観察の理論負荷性・観察者バイアス・理論の決定不全性
3. 学会等名 生命科学者のための科学哲学セミナー(日本生理学会若手の会主催)(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------